

御朱印ブームとアニメ聖地巡礼

—「脱魔術化」と「再魔術化」のはざまで—

外国語学部 国際文化交流学科 4年

清水 菜月

序論

第一章：縁を切り、縁を結ぶ

第二章：信仰の旅から観光の旅へ

第三章：アニメスポットからみる聖地巡礼

結論

序論

近年では年齢と問わず御朱印を集印する人が多い。御朱印ブームに伴い、2013年に行われた伊勢神宮の「式年遷宮」と出雲大社の「平成の大遷都」が重なった際にできた「御朱印ガール」という単語や、現地に行かないまま御朱印だけを集めようとする御朱印の転売行為がなされるなど、良いニュースや悪いニュースでも御朱印の話題を耳にする機会が増えた。

2000年代から広まったパワースポットブームもまた、御朱印ブームと連動して盛んになっている。主に女性たちがスピリチュアルな場に癒しを見出し、こぞって神社仏閣を訪れる現象である。そうした女性参拝者たちをより多く取り込もうと、神社仏閣側も自身をパワースポットとしてブランディングし、観光名所として売り出していくという現象が見られた。その方法としてお守りや絵馬をかわいくしたり、ファンシーな御朱印帳が新たに考案されたりもしている。

神社仏閣が立地する場所は、かつて神仏の顕現した謂れを持つ奥深い歴史と伝統に裏付けられた「聖地」でもある。そうした宗教的施設としてだけでなく、最近ではアニメに登場した場所を実際に訪ねることを「聖地巡礼」と称し、多くのアニメファンがアニメの舞台となった土地へ赴くという現象もみら

れる。

御朱印ブームとも多くの共通点を持つ、パワースポットやアニメの聖地巡礼などの背景として「縁」が重要なキーワードとして浮かび上がる。人と人との関わりは「場所」を通した「縁」によって支えられる場合が多い。同じ場を共有することで、人と人とが強い絆で結ばれていく。「縁」はまた、神仏への信仰の世界との結びつきにも拡大され、それが御朱印ブームやパワースポット、さらにはアニメ聖地巡礼にもつながっていく。

以上のような見通しのもと、第一章では「縁」というキーワードをめぐる、それを「切る」と「結ぶこと」の意味について考える。第二章では、近代化と共に信仰の失われていく過程を「魔術からの解放」という言葉をキーワードに跡づけ、「聖地巡礼」という宗教的行為が、近代化を経たのちに、新たに「観光」という形態を取って復活する再魔術化の様子を見ていく。そして第三章では、アニメの聖地巡礼の事例を通して、人が生きる上で「縁」を取り結ぶことの大切さを跡づけていきたいと思う。

第一章：縁を切り、縁を結ぶ

「エンガチヨ」という言葉をご存じだろうか。ジブリ映画のひとつ『千と千尋の神隠し』の一場面はこの言葉はでてくる。

この作品には、主人公千尋と仲良しの、ハクと呼ばれる少年のキャラクターが登場する。しかしハクは、この世界で独裁的な力を握る湯婆婆にあやつられる存在であった。そのようなハクを助けようと、「名のある河の神」からもらったニガダンゴを、千尋はハクに飲みこませる。するとハクは、体内にあつ

た錢婆婆の契約の印鑑を吐き出す。印鑑に施されていた呪いの虫を、千尋がその足でべちゃっと踏みつぶした際に、釜爺が「エンガチョ！ 千、エンガチョ！」とさげふ。そして千尋が両手の親指と人差し指を合わせて円を作り、「切った！」の声と共に釜爺が手刀で円を切る動作をする。これは呪いの虫を踏み潰したことによって身体に着いた穢れと縁を切り、その穢れから千尋が自由になるという意味合いで用いられた言葉なのである¹。

エンガチョはもともと、不浄のものを防ぎ、遠ざける為に囃したてる、子供たちによる口遊びのひとつである。『デジタル大辞泉』²によれば、その語源は不詳とされるが、中世史家の網野善彦によれば、エンは穢れたものとの「縁」を表し、チョは擬音語のチョンが省略されたもので、意味としては「(穢れとの)縁を(チョン)切る」の意味だという。他に「因果の性(いんがのしょう)」の転訛とする説や、「縁が千代切った」の略とする説などがある。口で「エンガチョ」と囃したて、指先や身体で防御の印を結ぶことで、不浄なものの感染を防ぐ事が可能となる。

では、そもそも「縁」とはどのような概念なのだろうか。「縁」には三通りの読み方がある。「えにし」「えん」「ゆかり」の三つだ。『新明解国語辞典第七版』³において、この三つは次のように定義付けられている。「えにし」と読めば、以前からの宿命でそうなった人と人や物との結びつきを意味し、「えん」と読めば、仏教の思想からある運命になる巡り合わせや婚姻・肉親・師弟の関係などその人の生活と切り離すことができない人間同士の結びつき、また、その結びつきのきっかけを意味する。「ゆかり」と読めば、たどって行けばその人になんらかの関係が有ることを意味する。このように同じ「縁」という漢字を用いていても、読みが異なることで、意味が多少変化するのだが、「エンガチョ」はこうした人と人との多様な結びつきを、一切断ち切ることであり、網野善彦はこれを無縁の境涯ととらえた⁴。

今では物語の中の単なるエピソード、すでに失われた過去の民俗的な迷信と思われ、死語となってしまったエンガチョであるが、コロナ禍の現在、この言葉がリアルな形で再浮上し、実感をもって受け止められるようになった。新型コロナウイルス感染拡

大によって人との関係に距離を置くことが求められ、それが却って人と人の繋がりを重要視する意識を高めたのである。感染拡大を防止するため、4月7日に緊急事態宣言が発令され、3密を避けると共に、人との距離をとることがなれば強制された。海外ではロックダウンが行われ、スーパーなど日常生活用品の購入ができる店以外での外出が規制され、飲食店等は営業することが許されなかった。

私たちに身近な例でいえば、上半期に予定されていた旅行も、芝居も、ライブも、すべて延期または中止となり、様々なものの動きが止まった。飛行機は、国外便はもちろん、国内便も運行さえ見合わせとなっている。さながら江戸時代の鎖国のようだ。人との縁、場所との縁、いろいろなモノとの縁が半強制的に切られる状況になっている。ソーシャルディスタンスという言葉も新たに生み出され、新しい生活様式の必要が叫ばれる。人との距離を保つ為にテレビ番組ではリモート収録やアクリル板が利用され、人々はマスクをし、店に赴けば除菌ジェルが用意され、レジに並べば飛沫感染防止シートで遮られている。店頭には「買い物はできる限り最小限の人数で」の張り紙がされ、在宅勤務やオンライン授業が当たり前になっている。まさしく「エンガチョ」だ。

だが、縁を切る行為があれば、また縁を結ぶ行為もある。SNSを利用した生配信やリモートで行われる会議や飲み会などが一方で増えている。人との物理的距離が離れても、人との関わりを保とうと、新しい人との繋がり方が様々に工夫されている。新型コロナウイルス感染拡大によって、却って人と人の繋がりが重要視される。屋外であれば感染のおそれは少ないことから、縁結びや開運を求めて神社仏閣へと赴く人は、今後ますます増えるだろう。こうした状況下において、御朱印ブーム、パワースポットめぐり、アニメの聖地巡礼を位置付けたとき、縁を結びたいという人々の強い欲望の現われとして、それらのもつ意味が改めて捉え返されてくるように思う。

第二章：信仰の旅から観光の旅へ

マックス・ウェーバー（1864～1920）の「魔術からの解放」という言葉を知っているだろうか。人類は時代と共に合理化を進めてきたが、合理化過程の長期趨勢を「魔術からの解放」と彼は定義付けた。ここでいう「魔術」とは「宗教」のことで、旧教のカソリックと新教のプロテスタントとの激しい宗教対立を乗り越え、それを克服することでヨーロッパ近代の歴史は始まった^v。

ヨーロッパにおける宗教対立の代表例としてドイツ30年戦争があげられる^{vi}。ルターによって1517年に始まった宗教改革から、ほぼ百年後に起こった三十年戦争は、最後にして最大の宗教戦争である。ドイツ内の新旧両派の対立が、ベーメンでの事件を期に全ドイツに広がり、さらに西ヨーロッパの新教国、旧教国がそれぞれ介入したことによって大規模な国際紛争となった。そして、フランスが旧教支援から途中で新教支援に転換したように、単なる宗教戦争にとどまらず、ヨーロッパの覇権を巡る国際的な戦争へと変わっていった。この戦争の形態は、鉄砲の使用による集団戦という近代的なものになっていたが、その兵力は各国王も領主も傭兵に依存しており、この段階ではまだ近代的な国民軍は編成されていなかった。

三十年戦争は、ドイツ領邦間の宗教戦争から始まったが、ヨーロッパの各国が介入することによって国際的な戦争となり、その結果、封建領主層は没落し、神聖ローマ帝国という中世国家が解体され、プロイセンとオーストリアという主権国家が形成された。同時に、15世紀末に始まったヨーロッパの主権国家体制が確立したとされる。

ヨーロッパ近代の主権国家を支える政治思想として、ホッブズ（1588～1679）によって唱えられた「社会契約説」^{vii}がある。『リヴァイアサン』(Leviathan)は、トマス・ホッブズが著した国家についての政治哲学の著作である。ドイツ30年戦争に代表される宗教戦争や内戦などを通じて国家の新たな哲学的な基礎付けが求められるようになった。ホッブズは、イギリスでの内乱を通じてこの問題意識を持つようになり、新しい国家理論の基礎付け、新たな政治秩

序を確立することを目指した。

ホッブズは、人間の自然状態を、決定的な能力差の無い個人同士が互いに自然権を行使し合った結果としての万人の万人に対する闘争であるとし、この混乱状況を避け、共生・平和・正義のための自然法を達成する為には、「人間が天賦の権利として持ちうる自然権を国家（コモンウェルス）に対して全部譲渡（と言う社会契約を）するべきである」と述べ、従来の王権神授説に代わる、絶対王政を合理化する理論を構築した。

ホッブズによって提示された「社会契約」という発想は、ジョン・ロックから、さらにフランスのルソーへと引き継がれ、絶対王政から共和政体へと移行するフランス革命（1789～99）の理論的支柱となった。そこで採られた共和政体が、「政教分離」を原則とする近代国家の基本的モデルとなっていったのである^{viii}。マックス・ウェーバーのいう「魔術からの解放」も、この政教分離原則を踏まえて一層の合理化を推し進めようとするものであった。公的な政治の領域での宗教的な活動を禁止する政教分離原則の下、私的領域へと追いやられた人々の信仰心は、ではその後どうなったか。

現在のナショナリズム（民族主義）が、自民族の文化や社会、宗教を絶対化して、あたかも新興宗教のような形態をとることはよく知られている。イスラム圏に見られる政治と宗教の合体運動などを見ると、合理化過程の深化ではなく、かつての魔術的心性への回帰ではないか思われるほどである。今村仁司によれば、それらの動きを指す言葉として、「再魔術化」という用語が新たに登場した^{ix}。

「再魔術化」は時代を逆行させる現象なのではなく、行き過ぎた合理化への「揺り戻し」としてあらわれてくる。実際にはどの時代にあっても合理化と反合理化は共存していたのだ。魔術化と、ウェーバーのいうそれからの解放の二つの傾向は、対立関係にありつつも社会と文化の不可欠の構成要素でもあった。時代に逆行した「再魔術化」にも見える現象が、実際には一種のユートピアのように新しい合理化でもありうるという皮肉な事態が現れていると、このように今村は述べる。

ならばウェーバーのように、魔術化と反魔術化を

機械的に対立させるのではなく、また政教分離のように、「公」と「私」の区分を立てて宗教を非合理的なものとし、私的領域に封じ込めるのではなく、両者を相互に影響しあう関係として捉える必要があるのではないか。イスラム原理主義の台頭にもみられるように、どの時代でも新たな解放運動は、疑似宗教的形式をまとって立ち現れてくるのだから。そしてここにいう「再魔術化」の一つの現れとして、聖地としての神社仏閣を訪れる御朱印ブームや、アニメ聖地巡礼もあると述べるとしたらいささか強引に過ぎようか。

そもそも巡礼とは、日常的な生活空間を一時的に離れて、宗教の聖地や聖域に参詣し、聖なるものにより接近しようとする宗教的行動のことである⁸。各地によって呼び方は異なる。例えばフランス語では「pèlerinage (ペルリナージュ)」、英語では「pilgrimage (ピルグリミッジ)」、ドイツ語では「Pilgerfahrt (ピルゲルファールト)」であるが、これらは基本的にラテン語の「peregrinus (ペレグリーヌス)」を語源としており、基本的な意味は「通過者」や「異邦人」である。このラテン語の意味からも明らかのように、巡礼の根本的な形は、遠い聖地に赴くということにある。各信者の居住地にも教会堂などの宗教施設は存在するのだが、それらに赴く行為のことを「巡礼」と呼ぶことは無い。巡礼というのは、日常空間あるいは俗空間から離脱して、非日常空間あるいは聖空間に入り、そこで聖なるものに接近・接触し、その後、再び元の日常空間・俗空間に復帰する行為なのだ。

巡礼者の訪れるこうした「聖地」には、その土地固有の霊的なパワーが秘められているとされ、これを古代ローマ人は「ゲニウス・ロキ」と呼び畏れうやまった。「ゲニウス・ロキ」は、ローマ神話における土地の守護精霊のことである。「地霊」と訳され、蛇の姿で描かれることが多い。そういえば日本の神々もしばしば蛇の姿で現れる。脱魔術化を経た欧米での現代的用法では、土地の雰囲気や土地柄を意味し、守護精霊を指すことは少ない。とはいえ、たとえばイタリアの建築家アルド・ロッシ (1931～1997) が提唱した新合理主義⁹は、その基本原則として、「アプリアリ」、「元型」、そして「ゲニウス・

ロキ」の3つを挙げる。その建築が立地する土地柄や国柄に即した自然な表現を重視し、近代以降に持ち込まれた過度な装飾を廃した新合理主義の様式は、建築だけでなく芸術全般に支持を広げていった。そこでいうゲニウス・ロキへの巡礼が、宗教という外皮をはがされ、それが継続して行われるとき、ヨーロッパの文化的起源をたどるグランドツアーという別の形で現れたとも考えられる。

グランドツアーとは、17-18世紀のイギリスの裕福な貴族の子弟が、学業終了時に行った大規模な国外旅行である¹⁰。17世紀になりそれまで続いたヨーロッパの戦乱が落ち着きを見せ、宿や駅馬車、交通網など旅行に必要な環境が整ったことが、グランドツアーの背景にある。それ以前の旅行は、商用など実用的な目的があるものばかりだったが、グランドツアーの流行は私的な旅行が始まった時期と重なっている。

旅行というのが、おおよそ数か月から8年というのがヨーロッパの人達にとって普通の時代だった。家庭教師が同行を務めるのが一般的で、旅行の間、若者は近隣の諸国の政治、文化、芸術、そして考古学などを同行する家庭教師から学んだ。彼らは見物したり、買い物に精を出したりする。グランドツアーは、若いイギリスの青年達にとっては、様々な実情や状況に合った生きた知識を手に入れるための実用的な好機でもあったのである。

旅行の最初のスタートは英仏海峡を渡ること、カレー (フランス北部パド＝ド＝カレー県の都市)¹¹を経てフランスに入る。フランスは、その礼儀作法や社交生活の洗練さによって、イギリスの貴族階級の高貴さとはまた違う上品なマナーを身につけ、態度振る舞いに磨きをかけることから人気であった。

イタリアは、古代ローマやルネサンスの遺産が多く、最も人気のある場所のひとつであると同時に、芸術を志す若者が、ヨーロッパ各国から古代の彫刻などから学ぶ為に来る場所でもあった。ルネサンスの遺産に影響を受けたこうした若者たちによって、イギリスにも古代ギリシャ・ローマ風の新古典主義の建物が多く造られるようになったと言われて

いる。
グランドツアーの黄金期はフランス革命の開始と

ナポレオンの登場による大陸の混乱と共に一旦の終焉を迎えるが、19世紀に入ってから、最良の教育を受けた若者たちは、グランドツアーに出かけるのが常であった。その後、若い女性たちにとっても一種のファッションになっていった。パトロンとなってくれるオールドミスとイタリア旅行をするというのは、上流階級の淑女にとって教育のひとつの機会になっていた。トーマス・コーヤットの本『Coryat's Crudities』の大ヒットは、グランドツアーに出かける若者たちのためのマニュアルが求められていたことの証である。19世紀に入ると、イギリス人だけでなくヨーロッパ諸国やアメリカの若者へもグランドツアーの風習は広まり、蒸気船や蒸気機関車の登場により、行先はより拡大され、ついには世界一周旅行へと繋がっていった。

日本でも、古代より「物見遊山」と称し、神社仏閣への参詣が行われていた。一向一揆などが頻発した戦国動乱の激しい宗教対立を経て、社会の安定化が見られた江戸時代中期以降、伊勢神宮などの参詣ついでに、名所巡りや飲食を楽しむ旅が庶民に広がった。これらは旅、行旅、遊山などと呼ばれ、寺社や景勝地を紹介した各地の名所図会や『東海道中膝栗毛』のような旅行文学も刊行された。鉄道敷設などの交通手段の近代化に伴い日本人の国内旅行も更に盛んとなり、明治時代後半には遊覧旅行の意味で「観光」の語が使われるようになった^{xiv}。

庶民に観光と言うものが流行り出した当初は、観光に行くという事自体が贅沢な行為であり、場所やそこで何をするのかということには重点が置かれなかったが、次第に観光に行くこと自体は当たり前となり、何処に行くのがステータスとなった。しかし、この頃から行くこと自体はステータスではなく、今のような純粋な楽しみとしての観光が広まる。場所ではなく目的が観光を引っぱる時代となった。〇〇をしたいからそれができる場所を観光しよう、ということだ。そしてコロナ禍の現在、そこに新たに「縁」を求めるといった目的が加わった。御朱印ブームやアニメ聖地巡礼は、そうした動向にさおさすものとしてとらえられるように思う。

第三章：アニメスポットからみる聖地巡礼

宗教において重要な意味を持つ聖地に赴くことから転じ、今では、映画・小説・マンガ・アニメや、バイク・鉄道・著名人などに縁の深い場所を聖地と称し、各々の愛好者が訪れることを聖地巡礼と指すことが多くなった。愛好家による聖地巡礼は今に始まったことではなく、古くから世界中で行われていた。例えば、ドイツの作曲家ワーグナーの聖地「バイロイト祝祭劇場」や、アメリカにあるジャズの聖地「ニューオーリンズ」、日本においても多くの漫画家を輩出したマンガの聖地「トキワ荘」^{xv}などが広く知られている。

宗教行為ではない巡礼の中でも、特にアニメ作品の舞台となった土地や施設を訪れるアニメの聖地巡礼が有名ではないだろうか。作品側がロケ先等の具体的地名を隠さずメタフィクショナルに作品に取り入れていき、結果としてファン側が「聖地」を発生させた例として、『天地無用!シリーズ』がその筆頭かつ代表例として挙げられる。ロケ地のみならず登場人物名や作内の固有名詞に一定圏域の地名に由来する命名を用い、積極的にこれらのロケ地および命名由来地を結びつけて「聖地」とアピールし、メディア側からニーズを掘り起こしていった。

逆にメディア側のアピールに拠らず「ファンがロケ先を探し出して探訪する」という形式による場合は『美少女戦士セーラームーンシリーズ』を源流に挙げるケースが見られる。以降、テレビアニメが聖地巡礼を誘発した初期の例としては、2007年に放送された『らき☆すた』がある。『らき☆すた』に後続する聖地巡礼を呼び起こすようなアニメでは、「実際の風景や建物の写真を用意し、それをトレースしてアニメの背景を作る」という手法が採用された。原作の舞台となった場所のロケーションハンティング自体は、アニメ化に際して以前から行われていたが、それが聖地巡礼と結びついたのは『涼宮ハルヒの憂鬱』がきっかけであった^{xvi}。

何故アニメのファンは聖地巡礼と称し、アニメにゆかりのある場所へ赴くのか。多くの理由があると思うが、一番はキャラクターが体験したことを追体

験することで、作中のキャラクターがより「生きている」と実感できるのではないだろうか。例えば『ラブライブ!』^{xvii}という秋葉原を舞台にした作品がある。作中に登場する場には、主人公である高坂穂乃果の実家のモデルとして登場する老舗甘味処「竹むら」や、音ノ木坂学院のライバル校として登場するUTX学園のモデルである「秋葉原UDX」、東條希のバイト先やμ's(ミューズ)の練習の場として登場する「神田明神」などがあり、また秋葉原の町がモデルとなっている。その後『ラブライブ!』はシリーズ化し、その他のシリーズでも秋葉原の町が登場していることから、秋葉原は『ラブライブ!』の聖地となっている。

また、実在の場所が作中に登場することで、キャラクターと場所の結びつきが強くなり、その「世界」に入った気分になることができる。その場所に行くことでキャラクターに会えるかもしれないという、決してあり得ないことがあり得るかもしれない気分になれるのだ。現在では『ガールズ&パンツァー』の舞台である茨城県大洗町など、聖地巡礼に訪れるファンによって町おこしがなされているケースもみられる。

経営学の観点からアニメ分析を行っている湯川寛学^{xviii}によれば、地域側のブーム追随者やアニメをリアルタイムでは見ていないオタク、一時遠のいていたが再度戻ってきたオタクも加わって、まち全体とオタクとの間で新たな価値の創造がなされるようになった^{xix}。具体的には「アニメが地域に溶け込む」こと、「アニメオタクが地域にとってなくてはならないものになる」こと、また旧豊郷小学校のような「聖地の核を変容させる」こともある。この過程で地域側の人々はオタクによって自分たちのまちの魅力を再認識させられる。そして両者がフィードバック効果をもたらして、その町の新たに創られた魅力に気づかされる。外部者であるアニメオタク側から見れば、リピーターとなったり、大洗町の事例のように、そのまちに移住したりもする。まちの住民は自分たちの町に対する誇りをより一層持つようになる。この二重の価値創造がまちの魅力を顕在化させていると湯川はいう。

多くの場所をめぐる聖地巡礼とは、偶然に近くにあったから、思い返してみたらアニメに登場した場所

だった、という理由ではない。明確にその場所に行きたいと思い、赴き、作品の世界観を実感したい。そんな想いが原動力となっていると考えられる。それを宗教で置き換えると、御朱印ブームとなるのではないか。

御朱印とは、本来寺院を訪れて参拝者が写経を奉納した証として授けられるもので、朱の印肉で捺した印を指す。現在では、初穂料を渡し、神社仏閣を訪れた証として授けられるものである。御朱印を受け取る行為には、受け取った人とそれを授けた神社仏閣との「縁」というか、アニメ聖地巡礼と同じように、そこに祀られた神仏の、その祀られた経緯を記す「物語」との「縁」を結ぶという意味が込められている。

現在、最も古い御朱印は室町時代末期から江戸時代初期に存在が確認されている。そして御朱印と呼ばれるようになったのは昭和初期と言われている。御朱印の墨の黒と朱肉の赤のコントラストは、さながら神仏からの直接的なメッセージの込められた呪符のようにも見受けられる。ただ、「縁」を結ぶ為に寺院を訪れるのではなく、その場所を直接訪れることで、神社仏閣が纏う空気に触れ、そこに鎮座します神や仏と直に出会い、固いきずなで結ばれる「契約」の証として御朱印はあるといえよう。

結論

2000年代から広まったパワースポットブームをきっかけに、集印する人が増え始めた御朱印。墨の文字と朱色の印のコントラストの美しさと共に、個性ある筆づかいと印影のデザイン性が多くの女性の心を魅了したのである。パワースポットブームとも重なり、神社仏閣を訪れる女性は増えている。新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、最近では疫病退散の願いがこめられたアマビエが描かれた御朱印も注目を集めている。お寺や神社だけでなく書店でも御朱印帳を販売していたり、御朱印特集が雑誌で組まれたりすることも多くなってきた。

御朱印は、お寺や神社、地域、季節、行事、天候、あるいは巡礼ごとに違う個性のある文字や印が見られるのが魅力の一つとなっている。一言で

「御朱印」といっても、お寺と神社で異なっている部分や、集印は宗教行為であるにもかかわらず「巡礼」という形ではなく、風光明媚な観光地を「めぐる」という新しい旅のスタイルで表現されるようになってきている。これまで見て来たようにめぐるといふこの新しい旅のスタイルは、ヨーロッパのグラントゥアーを起源として近代以降に現れる。

こうした現象の背景には、近代社会に特有の物の考え方、その行き過ぎた合理主義的な考え方に対する「揺戻し」という側面があるように思われる。私たちの生きる近代という時代は、政教分離により宗教的行為を公的な場から追放することで始まった。しかし、従来は宗教行為としてあった人々の巡礼行為が、それで消え去るといふわけではなかった。それは「観光」という新たな装いのもと、生き続けている。近代という時代はまた、個人の自由を最大限に認める一方で、従来からあった「縁」の希薄化をもたらした。たとえばインターネットで気軽に多くの人と繋がる事が出来るとはいえ、それはあくまで疑似的なもので、ごく身近にいる隣人の顔はおろか、その名前すら知らないように、生身のからだを伴った実質的な「縁」は極めて希薄になっている。それを埋め合わせるかのように強い「縁」で繋がれることを人々は逆に求める。

人との結びつきだけではない。日ごろ見失われが

ちな「大地」や「国土」のひろがり、まわりの「自然」や「環境」の中に、自らを改めて位置づけ直す。そうした中で希薄化した「人」や「地域」、「大地」や「自然」との結びつきを再度回復し、確かめる。それはまた、近代以前の「宗教」的性格と、近代になって始まる「観光」という文化的営みの中間地点に位置し、近代社会のもとで希薄化し、失われた神や仏などの「聖なるもの」との縁を再度取り戻す行為としても捉えられる。何かと縁を結びたいという熱い思いから、宗教とはおよそ縁がないように見える若い人たちの間でも、ブームは続いている。縁を結ぶことは、金銭には代えられない価値があるのではないだろうか。

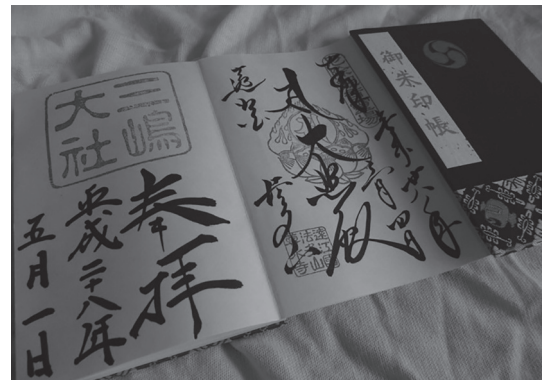


図 御朱印

参考文献

- 網野善彦、『無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』、平凡社、1996年、pp.13-14
 国土交通省『観光白書』
 カロ、ゴヤ、ドーミエ、『人間の記憶の中の戦争』、みすず書房、1985年
 鈴木博之、『東京の地霊(ゲニウス・ロキ)』、筑摩書房〈ちくま学芸文庫〉、2009年
 深沢徹、神奈川大学人文学研究叢書41、『新・新猿楽記：古代都市平安京の都市表象史』、2018年3月30日
 新解明国語辞典第七版、三省堂、2013年12月10日
 阿部めぐみ、「神社における御朱印の通史」、神社本庁総合研究所紀要、22、2017年6月
 伊藤和良、「御朱印集めの魅力」、No-dig today、96、2016年7月
 井上修一、「フランスにおける政教分離の法の展開」、佛教大学教育学部論集第21号、2010年3月
 岩生成、「御朱印船の絵馬について」、日本歴史、27、1950年8月
 古柴保之、「日本の帆船史5 御朱印船が往く」、月刊新自由クラブ8、86、1984年11月
 村瀬大翼、「巡礼をする人のための《御朱印》入門」、大法輪77、9、2010年9月
 湯川寛学、「アニメオタクと“聖地”との価値共創メカニズムの解明—「涼宮ハルヒ」「らき☆すた」「けいおん!」「ガールズ&パンツァー」の地域おこし事例分析—」、(https://www.j-mac.or.jp/oral/fdown.php?os_id=76)、日本マーケティング学会 カンファレンス・プロシーディングス vol.6 (2017)
 朝日新聞出版知恵蔵 mini

後注

- i 日本の民俗風習におけるこうした「穢れを防ぐ行為」は古来よりあるとされており、13世紀ごろの『平治物語絵詞』には、信西(しんぜい)の生首を見ている人々が人差し指と中指を交差させている図が確認されている。エンガチヨは鉤十字の魔除けに起源を持ち、戦前までは頻繁に行われていた。
- ii kotobank、コトバンク(デジタル大辞泉)朝日新聞社、2020年10月8日閲覧。(https://kotobank.jp/word/%E3%81%88%E3%82%93%E3%81%8C%E3%81%A1%E3%82%87-447400)
- iii 「縁」pg.152、「えん」pg.156、「ゆかり」pg.1542
- iv 以下の記述は網野善彦『無縁・公界・楽 日本中世の自由と平和』(平凡社、1996年)による
- v なおウェーバーは、その著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、プロテスタントの世俗的禁欲が資本主義を推し進める原動力となったとしてこれを批判的に分析し、新たに「宗教社会学」という研究領域を立ち上げて「宗教」のもつ社会的影響力を重視した。
- vi 「世界史の窓：世界史用語解説 授業と学習のヒント」による(https://www.y-history.net/appendix/wh0904-090.html)
- vii 思想家ジャン＝ジャック・ルソーによって執筆され、1762年にフランスで公開された政治哲学の著作。ルソーは人間の本性を、自由意思を持つものとして考え始める。自然状態では各個人は独立した存在として自己の欲求を充足させるために行動し、生存の障害が発生すればその解決のために各個人同士で協力関係を求める。こうして生じる個々人の約束は社会契約の概念として把握される。社会契約の枠組みに従って国家が正当化されるためには、人間の自由な意思が社会契約の中で保障されていなければならない、個人のための国家の在り方を論じている。
- viii 井上修一「フランスにおける政教分離の法の展開」、佛敎大学教育学部論集第21号(2010年3月)による。
- ix 以下の記述は今村仁司『時事用語事典：再魔術化』(2020年10月8日閲覧)による(https://imidias.jp/genre/detail/L-101-0018.html#:~:text=%E9%AD%94%E8%A1%93%E3%81%8B%E3%82%89%E3%81%AE%E8%A7%A3%E6%94%BE%EF%BC%88%E5%91%AA%E8%A1%93,%E3%81%AF%E5%AE%9A%E7%BE%A9%E3%81%97%E3%81%9F%E3%81%AE%E3%81%A7%E3%81%82%E3%82%8B%E3%80%82)
- x kotobank、コトバンク(日本大百科全書(ニッポニカ))小学館、2020年10月8日閲覧、による。(https://kotobank.jp/word/%E5%B7%A1%E7%A4%BC-78732)
- xi 土地を数量化して売買や投機の対象とするような行き過ぎた合理主義に反省を迫る運動。
- xii kotobank、コトバンク(世界大百科事典 第2版)株式会社平凡社、2020年10月8日閲覧、による。(https://kotobank.jp/word/%E3%82%B0%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%83%89%EF%BD%A5%E3%83%84%E3%82%A2%E3%83%BC-1161629)
- xiii ドーバー海峡(カレー海峡)の海底を英仏海峡トンネルが通りイギリスのフォークストーンと結んでいる。
- xiv 【明治あとさき 維新150年】(1)旅/寺社参詣から文化観光へ 岩倉具視、京都再生へ「誘客」の妙手『読売新聞』朝刊2018年1月1日
- xv 東京都豊島区南長崎三丁目
- xvi 原作者谷川流の出身校でもある兵庫県立西宮北高等学校が聖地巡礼の対象となった。
- xvii 『ラブライブ!』とは、東京都千代田区にある女子高等学校「音ノ木坂学院(おとのきざかがくいん)」を舞台に、3年後に迫る学校統廃合の危機を脱するため、9人の生徒(後のμ's)が立ち上がり、スクールアイドルとして活動することで、学校の名を世に広め、入学希望者を増やそうとする物語である。
- xviii 関西学院大学大学院 経営戦略研究科 研究員。
- xix 以下の記述は湯川寛学、「アニメオタクと“聖地”との価値共創メカニズムの解明—「涼宮ハルヒ」「らき☆すた」「けいおん!」「ガールズ&パンツァー」の地域おこし事例分析—」(https://www.j-mac.or.jp/oral/fdwn.php?os_id=76)p421(2020年10月8日閲覧)による